

注意点1



左手

テクニックの連続投入でスリリングさを生み出せ!

このメイン・フレーズで使用するラン奏法とは、ハンマリング、プリング、チョーキングなどのギター・テクニックを何度もくり返して、スリリングかつ高揚感のあるサウンドを生み出す奏法だ。ペンタ系フレーズで使用することが多く、ジミー・ペイジやマイケル・シェンカー、ザック・ワイルドなどが得意としている（もちろんこの3人以外のギタリストも使用している）。このメイン・フレーズでは、ハンマリングとプリングをくり返すが、フレットを素早く正確に捉えるように心掛けよう（写真①～④）。ラン奏法は勢いを付けて演奏することが多いので、ノイズが発生しやすい。両手を駆使して、余弦のミュートをしっかり行なうことが大切だ。



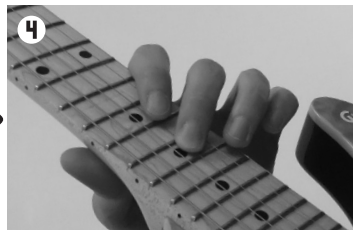
3小節目のアタマ。まずは2弦15fを押弦して……



2弦18fをハンマリング。中指は3弦上で待機する。



薬指でのプリング。続く、中指を意識して……



3弦17fを素早く押弦しよう。

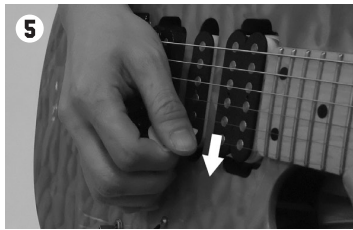
注意点2



右手

ラン奏法攻略のカギとなるインサイドの変則空振り

メイン・フレーズの出だし部分のピッキングは、やや変則的になるので注意が必要だ（写真⑤～⑦）。ここは1弦15フレット（ダウン）→18フレット（ハンマリング）→15フレット（プリング）→2弦18フレット（ダウン）という流れだが、ハンマリング&プリング時に空振りを入れず、1弦をダウンで弾いたら右手の動きを止めて、続く2弦のアップの待機状態にした方が良い。こうすることでミス・ピッキングが減り、リズムカルな演奏を行なうことができるのだ。このような6連符によるインサイド・ピッキングはミスを起こしやすいので、変則的なピッキングを取り入れることがある。フレーズ内容に合わせてフレキシブルに対応してほしい。



まず1弦をダウン・ピッキングする。



ハンマリング&プリング時に空振りを行なわず……



2弦をアップで弾こう。こうすることでミスが少なくなる。

注意点3



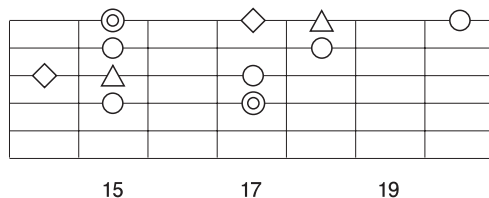
理論

哀愁感を醸し出す9th音を頭と指に叩き込むべし!

このメイン・フレーズでは、Gマイナー・ペンタに9th音（A音）というテンション・ノート【註】を加えたスケールを使用している（図1）。9th音（2nd音）は、スケール（コード）のマイナー感を生み出すm3rd音の半音下に位置するため、暗さや哀愁感を自然に備えた音だと言えるだろう（9th音を半音チョーキングして、m3rd音を鳴らすのは王道フレーズの1つ）。「いとしのレイラ」や「哀愁のヨーロッパ」などの泣きの代表曲でも使用されているので、泣きを極めたいギタリストは必ず覚える必要がある。ちなみに、b5th音はロング・トーンでは使用しづらいが、9th音はロング・トーンでも使用することができるのだ。

図1 Gマイナー・ペンタトニック+9th音

◎トニック=G音 ◇9th音=A音 △m3rd音=B♭音



9th音(◇)は、常にm3rd音(△)の1フレット分左側に位置する。

【テンション・ノート】 トライアドや四声音などの基本的なコードにさらに付け加える音で、9th系・11th系・13th系がある。ちなみにテンション・ノートを加えたコードをテンション・コードと言う。